

## 流星物質4 Girl Beats Girl 試し読み 目次

- ・ 憧れ to be kiss ..... 2  
著：珠洲鈴涼理
- ・ シナリオ通り ..... 4  
著：ころみこや
- ・ 文学部百合体験——ぶんゆり ..... 6  
著：柊晴空
- ・ ドレスアップ・ドール ..... 8  
著：風花
- ・ すい一つ☆ぱーてい ～贗作『ウォッチメン』～ ..... 10  
著：キャムキャムメロン
- ・ わたしはきのこ、きみはたけのこ。 ..... 12  
著：安房理弘
- ・ 純真×ぴゅあぶりーど ..... 14  
著：珠洲鈴涼理
- ・ 初キス大作戦！ ..... 16  
著：文里荒城
- ・ 45センチメートルの恋 ..... 18  
著：秋墨早希
- ・ Swe-eat-Me!! ..... 20  
著：執事オオカミ
- ・ あの娘とわたしのピロートーク ..... 22  
著：平山ひろてる
- ・ 奥付 ..... 24

## 憧れ to be Kiss

珠洲鈴涼理

最近、同じバレー部のセンパイが気になる。

緒方千豊おがたちとよセンパイ。

私よりも身長が三十センチくらい高いから、いつもお話をするときには私が見上げる。

届きたい——そんな気持ちで見上げるようになったのは、いつからだっけ。

だいたい百四十センチ——背の小さいことが何よりのコンプレックスだった私にとって、千豊センパイが見ているセカイは憧れだった。

高校に入ってからどの部活に入ろうか悩んでいたときに決めた手となったのは、千豊センパイの部活動紹介だった。

当時副キャプテン——二年生だったセンパイの堂々としたスピーチに、私は釘付けだった。心を射止められていた。

私はオトナっぽいと評判のブレザーを着込んでも子供にしか見えないから、すらっとした美脚とか、体操服の上から主張するプロポーションとか、きらきらと昼の日差しをまとう長髪とか。

千豊センパイの全てが憧れだった。

センパイに近づけば、センパイみたいに素敵なおレディ

ーになれるかなって、きつとちびっ子な私には一番不釣合いなバレーボール部に入部しました。

やっぱり身長とか運動能力に自信のある子ばかりで、バレー未経験の私にはハードルが高かったです。

でも初心者に優しく指導してくれる千豊センパイを見上げるたびに、何となく勇気をもらいました。

\* \* \*

入学して数ヶ月もするといわゆる「グループ」というのができていて、私もいつの間にか運動部の子の輪に混ぜられていました。

たまに話題に出てくる恋愛のこと。

サッカー部の先輩がかっこいいとか、同じ部のあの子が告ったとか告られたとか。とても私には早いな、ってぐらいにしか思ってませんでした。

私みたいな魅力もないちびっ子を、誰が好きになるんでしょうか。小学生の時に男子から身長のことなどで散々いじめられたのを思い出し、輪っかの隅っこで小さく耳を傾けています。

でも、気になることがあって。

千豊センパイに彼氏とかいるのかな？

あんなに美人で、成績もよくなってスポーツも得意で、

誰にも優しく、気配りもできて。

学校中のお手本みたいな優等生のセンパイだから、やっぱり学年を問わず人気なんだろうなあ。

やっぱり告白とかいっぱいされるのかな？

下駄箱にラブレターとか入ってて。呼び出しされて。

告白されて。

センパイのそういった話を聴かないのが不思議なくらいです。

もしかして好きな男子がいて、告白とか全て振ってたりして。

センパイの好きな人って、誰なんだろう。

\* \* \*

センパイは部活のとき、いつも髪の毛をシュシュでくくっていました。

後ろからちらりと見えるうなじが色っぽくて、真似したいと思いました。

でもそこまで髪は長くないし、何よりくせつ毛だからどうせ似合わないし……。

だから、おそろいのシュシュをこっそり買ったんです。「偶然同じですね、センパイ。えへへ」

右手に申し訳なく巻かれたそれを見て、「私よりも似合

ってるわよ」って言ってもらえたのが嬉しくて。

ちよっとだけでもセンパイに近づけたのになって。

## 【プロローグ】

また一人、あいつに攻略されてしまった。

残すは、あたしと結衣の二人だけ。でも、それがどれほど大変なことか、あいつは理解しているはずだ。だからこそ、あたし達を最後まで攻略せずにいたのだろう。

でも、他の子を攻略したからといって、あたし達を攻略する為に必要なものが揃うわけでもない。無理に攻略しようとしても、足掻けば足掻くほど見つともない姿を晒すだけだ。

ゲームの世界には、シナリオが存在する。

あたし達が生きる世界には、それが絶対的なルールとしてプログラムされている。

あいつが、たった一つの攻略ルートを導き出すには、あたしと結衣の存在は難敵と呼ぶに相応しいだろう。

勿論、あたしは攻略される気はないし、結衣を奪われるつもりもない。あたしと結衣の間には、特別な感情がある。それが壊れるはずなんてない。

攻略できるものなら、やってみればいい。

最後に笑うのは、あたし達だ。

## 【本文】

世の中には、シナリオが存在する。

シナリオとは、予め決められた道筋のことだ。この世界を生きる人達は、残念ながらそれに歯向かうことにはできない。この世に生を受けた時から、そのようにプログラムされているのだから当然だ。

勿論、あたし自身にも、それは当たり前のように組み込まれている。

だからこそ、今の状況が非常に厄介だ。

「おはよう、恵那ちゃん」

「おはよう、結衣」

あたしに声を掛けてくれたのは、同じクラスの結衣だ。結衣とは、高校に入ってから知り合った仲だけど、すぐに打ち解けることができた。

一年次に続いて、二年生になった今も、あたしにとって、最も心を許すことのできる理解者と言えるだろう。

何をするにも何処に行くにも、結衣とあたしは、いつも行動を共にする。それがあたし達にとっての日常であり、予め決められた道筋なのだ、とあたしは考える。

そう、このシナリオだけは、誰にも邪魔はさせない。

たとえそれが、この世界の主人公であろうとも。

「おっす、恵那」

教室に入ると、真っ先に声を掛けてくる奴がいた。

あたしの顔を見つけると、嬉しそうに笑いかけ、片手を上げる。いちいち反応が癩かんに障さわる。いつ見てもむかつく顔だ。お願いだから視界に入らないでほしい。

「おい、無視かよ」

すぐに眼を逸らして、あいつの姿を視界から消し去った。声は聞こえない振りをすればいい。何を言われても返事をしなければ、諦めるに決まってる。

「ねえ、恵那ちゃん。返事しないでいいの？」

すると、小首を傾げた結衣が、不安げな表情で問い掛けてきた。

「うん、別にいいの。アレはあたしにとって存在しないも同然だから」

あつげらかんと答えるあたしに、恵那は眼を丸くする。その言葉を聞いたあいつは、眉根を潜めた。恐らくは、気分を害したのだろう。

でも、それはあたしにとって都合だ。あたしのことを嫌いになればなるほど、シナリオ通りには話が進まなくなる。そうなってしまうえば、あたし達の勝ちだ。

ところが、そう簡単にはいかない。この世界を生きる

には、予め決められた道筋を辿る必要があるのだ。

「ごめんね、義之くん？ 恵那ね、今日は機嫌が悪いみたいだから……」

あたしが積み上げてきたものを、結衣が一瞬で崩してしまう。これもまた、いつもどおりの日常だった。

あいつがあたしに声を掛け、あたしがあいつを無視して、結衣があいつにフオローを入れる。あたし達にあいつを加えた三人が集まると、必ずと言っていいほど、今のような形に収まる。あたしは、それが嫌だ。

「いやー、いいんだよ。結衣が気にすることはないさ」  
あいつが、へらへらと笑いながら返事をする。

軽々しく結衣の名前を呼ぶな。結衣が心を許しているのは、あたしだけなんだ。

何も知らないただの主人公が、あたし達の仲を邪魔するなんて、あつてはならないことだ。それも、土足で入り込むような真似は絶対に止めてもらいたい。

あたし達の関係を穢けがさないでほしい。  
男なんて必要ない。あたしには、結衣がいればそれでいい。そして結衣には、あたしがいればそれでいいのだ。

あたし達二人は、つまりはそういう関係だった。

## 文学部百合体験——ぶんゆり

柊晴空

「先輩、愛し合ひましょう」

「へ？」

それは冬を間近に控えたある日の放課後。

とある静かな教室にて、突然後輩がそんなことをのたまいました。

あ、どうも私、浅沼マキナと申します。高2です。

黒髪ロングの超絶美少女と覚えておいてくださいまし。

そして目の前で私をまっすぐに見つめている茶色に近い黒髪お下げが後輩の須藤いろは。

私とこの子しかいない文学部の後輩です。二人きりとはいえ、それはもう清く正しい先輩後輩関係でした。

それがどこをどう間違ったのか、こんなことを言い出すように、一体どこで教育を間違ったのか。

「えーっと、いろはちゃん？ 突然何を……」

「だから先輩、愛し合ひましょう」

「ええええっ！ 私たち女の子同士だし、さすがにちよつと……でもいろはちゃんなら悪くは……」

「いや先輩、そういうシチュでっていう話ですからね？」

「なっ……」

「えー先輩そっちの方でしたか？ いやまあ、その方が

今の私には都合がいいような」

「ち、違うからっ！ 私はいたって普通！ 男の子が好きだから！」

「男が好きだなんて、やらしい先輩ですわね」

「そう言う意味じゃ……！！」

「それはそうと、これを見てください」

「話を聞いて！」

と言ったところでこのマイペース娘が取り出したのは一冊の薄い小冊子。

それを受け取ってパラパラと眺めてみると、一枚の挿絵に目が止まった。

なにこれ、女の子同士が裸で……

「この小説がガチユリでして」

普段ねむたげな表情なのに、こういう時だけはやたら瞳が輝いてるわね。

「ま、また買ってきたの？ なんでこんなエッチなものを……」

「濡れ場がいいんじゃないですか、見ます？」

「え？ いやあ……私は……」

「あ、じゃあ貸さない方向……」

「読み終わったらお願い！」

「ふふ……」

なんかすべて見透かされてみたいいな笑顔ね。

でも、興味がないわけでもないし、これは後学のため。そういう世界もあるんだって知るためなんだから。

「それで？ えーつとなんの話しをしてたんだっけ？」

「あー、いろが先輩と愛を育みたいっていう話しです」

「なんで突然そんなことを……」

「この小説の登場人物が女の子同士でラブラブしてるわけですよ」

「まあ、挿絵を見たらよくわかるわね」

「で、どんな感じなのかと。女の子が好きな人はどういう感情を抱いているのかと！ ちよつと体験してみたいなと！ 是非とも！」

ズンズンと詰め寄ってくるいろはちゃん。

そんな目の色を変えて言うことでもないと思うんだけど。まあ納得。

「それでいきなりあんなったわけなのね」

「イエスです。というわけで先輩よろしくお願いします」

「いや、よろしくお願いしますと」

「こうよくありそうなシチュを実際に演じてみて実感してみたいな」と

「ああ、それならそうと先に言ってくれたらいいのに……」

……

いきなり愛し合いましたよと言われても困るに決まってるじゃない。

「お、ということはやっていただけなのですか！」

「まあやってみたいっていうなら……部活の時間にすることでもない気はするけど」

「どうせ私たちしかいませんし」

確かにそうなんだけど、やっぱり文学部としては本読んだりすべきだと思ふのよね。

まあいいわ。

## ドレスアップ・ドール

風花

吉祥寺の駅を降り、駅前通りから細い路地に入つて三区画ほど進んだところに、麻衣の勤める老舗ドレスメーカー、「ミローゼ」はその門を構えている。お洒落な外装の店舗が軒を連ねる中で、その佇まいは決して派手なものではない。むしろ、どこか奥ゆかしさを感じさせるような趣で、訪れる者を迎え入れてくれる。

ミローゼは、所謂一般のブティックとは一線を画す品揃えで有名だ。店の中に一歩足を踏み入れれば、そこにはたつぷりとしたフリルや華やかな色柄のシルクリボン、ともすると過剰ともいえないような装飾といったもので飾られた洋服が並んでいる。それは、広く言われるところのロリータファッションで、ミローゼはそうした洋服を仕立てさせれば一級品との評判を得た、その筋のお嬢様、奥様方御用達のドレスメーカーである。今は土曜日の昼下がり、店の中はそうした洋服を求めてやってきたお客様でちょっとした賑わいを見せている。

「麻衣さん、次の新作の予定はいかがですか？」

「そうですね、来月には発表できるかと思えます」

「あら、それは楽しみですね。完成したらすぐに教えて頂戴」

「かしこまりました」

麻衣は新進気鋭のミローゼ専属ファッションデザイナーとして働いている。まだ勤め始めて二年あまりだが、彼女の作る新作はどれも好評で、彼女をひいきにするお客様も増えてきた。先ほど彼女に声をかけたお客様も、そんなミローゼの、麻衣の作る洋服に魅入られた一人だ。お客様は二時間ほどじっくりと店内の品々を見て回り、一点モノのブリーツスカートに大きな花柄が魅力のワンピース、アクセントに小さなエメラルドとパールが設えられたチヨーカー、薔薇細工が施された髪留めをお買い上げになった。両手に紙袋を提げ、上機嫌で店を出るお客様の背中を、麻衣は深々と頭を下げて見送る。

「ありがとうございます、また是非お立ち寄りください、奥様」

普段は店のバックヤードにある作業スペースで服を仕立てている麻衣だが、特に忙しくなる週末は、こうして接客対応にもかり出されている。さすがに慣れはしたものの、麻衣はこうした接客が苦手だ。というより人前に立つのが苦手なのであり、ロリータファッションを人前で披露するなどのもつてのほか、そういつて憚らない。

そんな志歩の一面を知ると、お客様は決まって、ああ、なんでもつたない、という顔をする。

麻衣の容姿からすれば、その指摘はもつともかもしれ



ない。流れるような髪に整った顔立ち、吸い込まれるような瞳に華奢な身体は、さぞロリータファッションによく映えることだろう。しかし当の麻衣はこの調子である。

そもそも、麻衣はロリータファッションに特段思い入れがある訳ではない。洋裁学校を卒業した同期達が次々に内定を取り、競争の激しいアパレル業界へと飛び込んでいく中、麻衣はその入り口でさっそく躓いた。漠然と洋服を作りたいという気持ちはあったが、まあ何とかなるだろうという漫然とした思いのまままで過ごしてきた。

その結果ふと気付いたときには、周りは皆、ずっと遠い先を走っていた。そんな麻衣が当てもなく転がり込んだのがここ、ミローゼであり、そんな彼女に手を差し伸べたのが、ミローゼのオーナー、志歩だった。

コンシェルジュの一人に休憩を告げてバックヤードに戻ると、そこには思いがけず志歩の姿があった。

「麻衣、邪魔してるよ」

志歩は麻衣の姿を見つけると、そういつて軽く左手を挙げてひらひらと振った。

「邪魔するならお帰りください」

「つれないなあ。ま、そう言うなって。それに、そもそもここは私の店じゃないか」

麻衣が肩をすくめて見せると、志歩は意地悪そうに笑みを浮かべた。麻衣は志歩に背を向けて給湯室へ向かう。

ポットにティー・バッグを入れて、たっぷりと熱湯を注ぐ。仕方ないので、カップを二つ用意した。いつものことだ、もう慣れた。

「今まで表にいたの？」

背中越しに志歩が尋ねた。肩越しに頷きを返す。

「そりゃまあ、お気の毒さま」

「本当にそう思ってる？」

作業場に戻り、ティーカップに紅茶を注ぐ。角砂糖を三つ放り込んで、志歩に渡す。

「いや、全然」

「……はあ。人手、増やせないの？」

「それは無理な相談ね」

志歩はそういつてカップを持ち上げると、湯気を立てる紅茶に息を吹きかけて、ゆっくりと口を付けた。透き通るような白磁に、真紅のルージュは良く映える。

「んっ、熱っつい！」

「でしようね」

麻衣はティースプーンで紅茶をかき混ぜながら、ちらりと志歩に目をやった。

すいーつ☆ばーてい　　く贖作『ウオッチメン』く

キヤムキヤムメロン

“ 日誌、二〇一一年二月二十日、今日、ひとつの計画が開始された。この世の中に血の通わない生物がいたとしても、人間に限ればそれは当てはまらない。しかし、それが仮の姿を持ったとき、その仮の姿は生き物なのだろうか。その存在のベールの中は確かに人間だ。ならそのベール自体は？　こう考えてみよう。マネキンに衣装を着せる。人々は魅力的に思う。それは衣装に対してだ。マネキンではない。もちろん、衣装をまとったマネキン、という全体を見てはいる、という人もいるだろう。しかし、本当は裸の自分を見て欲しいマネキンがいたとしたら？　そんな不安を抱えてはいるが、計画は動き始める。そう、私はマネキンである。ただし、ただそれだけで終わるつもりのないマネキンである。私は必ずこのベールを利用して、私自身に振り向く、そんな未来を掴んでみせる。この喜劇を見る者が失われた時、物語は終わるのか。多くの知識ある人々は小言とともに理屈を持ち出すだろう。私の答えは、対して簡単だ。『ネバー』。”

「ヒーローやりましょう！」

「チヨちゃんなんか言い出したな、って時は決して無視してはいけない。特に私に向かってなんか言ってきた時のしつこさは、それこそ自動でかき混ぜる機械納豆のように、時間を置けば置くほど粘度が増す。早い内に混ぜ返す（しかもチヨちゃんの自身の手によって、念入りになる）前にさっさと食卓に上げてしまつて、味がしつこくないうちに食べ終えてしまつて、味がない。」

「ねえねえ！　ホラ、マスクとかデザインしたんですよ！　今！」

「普通は「昼間の授業中に！」とかいうところを、ヒーロー発言をしてからこうして私が物思いにふけてしまった間に行動に移し、発展させる。これが私の後輩のチヨちゃんの、言うなればスサマジサだ。」

「ヒーローって、ナニよ」

「アサミさんー！　ダメですよー！　流行に乗らないと」  
チヨちゃんはノートの切れっ端に描いたマスクのデザインをちらつかせながら言う。

「ミス・モンブランですよ！　最近この街に現れた自警ヒーロー！　女の人らしいですよ！　カックイー！」

私はチヨちゃんからマスクのデザインを受け取る。なるほど、文芸・イラスト部のイラスト担当だけはあつて絵心はある。線は主線が確立しているし、何よりバラ

ンスもイケてる。でもデザイン自体はなんだかなあ、である。これじゃ昭和のプロレスラーだ。

「あらあら、チトちゃんまた絵を描いたの？」

窓際で本を読んでいた栗山先輩がこちらに目を向けてくる。我が文芸・イラスト部の文芸担当だけあって、教科書通りの文学少女をしちえる三年生だ。黒髪ロングに臙脂のメガネ、校内にファンは多い。小説は書かないけれど、詩や短歌で県の入選経験がある、わりとすごい人だ。美人で背も高いし。

「先輩なら知ってますよね！ 茨城の水上市のヒーロー！」

「知っているというか、見たことはないけれどね、昔いたっていう、クロック・プレイヤーとデイ・ドリーマーでしょう？」

栗山先輩はここ仙台に引っ越してくる前、中学卒業までは茨城に住んでいた。その当時からキレイ目で学問の優等生だったらしい。なんでこんな平々凡々な高校の弱小マイナー部に入っちゃったんだか。

「ねえねえ、アサミさん！ ヒーローやりましょうよー、かっこよく街の治安とか守りましょうよー！」

「無理よ、私、運動はからっきしだし」

「そー言わないで、なんとかなるって！ やってやるって！ ミニッツメンもウォッチメンもみんな生身だった

んだし、大丈夫ですよ！」

チヨちゃんは何か決定的に間違ってる。

「ミニッツメンのほとんどは悲劇的に終末を迎えているし、ウォッチメンだって世界を大混乱に落とし込んだでしょう？ チトちゃん、あまりいい話だとは、お姉さん思わないな！」

栗山先輩、なにかやたらと詳しい。そう言われ、チトちゃんは頬をふくらせて「むー」と唸りながら黙り込んでいる。放っておいてもいいと思う。あの娘は思い込むところだから。小学生のころから変わってない。

わたしはきのこ、きみはたけのこ。

安房理弘

出会った日に喧嘩をして、その次の日にも言い争って、一週間が経っても罵声を浴びせあっていたことを、今でも忘れられない。

わたしときみは、仲が悪かった。

最初に会った日のことも今でも覚えている。

入学式、苗字の早い順に並ぶ列で、わたしのすぐ前に立っていたきみのことを始めて見たときに、思った。

——この子と仲良くしておけば、きっと今度こそ上手くいく。

第一印象、好感触。絶世の美少女。それもクラスの人気者というイメージを勝手に抱いてしまうくらい。

だからわたしは、きみに声をかけようと、入学式の間ずっと勇気を振り絞ろうとしていた。でも、入学式の話とかがある間は、緊張もあつたし話しちやいけないうじゃないかって思ったりして、なかなか声をかけられずにいたんだ。

入学式が終わって、列になったままわたしたちは体育館から出て行く。列のあちこちでは、一人目の友達を得たクラスメイトたちがひそくすくすく喋り合っている。先頭にいる担任は大らかで、特に咎めることもない。担

任は体型も大らかだ。担任が先導して、クラスまで案内されることになっていた。そのとき、わたしは一段と強く決心して声を出そうとする。

「あ、え、あ……あのっ……」

世界を止めるリモコンの一時停止ボタンを誰かが押した。そう思った。声が出ない。情けない自分が嫌になる。声がきみに届いたのか、不安だったから。

「ん、どつたの？」

調子のいい男が手のひらを返すよりも早く、きみは振り返って、わたしを見た。

きみのその瞳。その口元。その端正すぎて整形を疑うくらいに整った顔立ち。劣等感があつた。でも、むしろ。

「顔、赤いよ？」

心配そうに眉をひそめるきみに。

「これからよろしくね」

からっとした笑顔で微笑んでくれるきみに。

何も言えずにこくりと頷くわたしは——

きみを見るだけで頬を赤くしてしまうくらい、あつてなく、単純に、わたしが持たないもの懂れるものをすべて持っているきみに、心を奪われていた。

しかしその華やかで美しい幻は、すぐに壊れた。

「好きなお菓子とかある？」

きみが小声で振ってくれた話題に、わたしは答える。

「きのこの山」

そう、その言葉が爆弾の導火線に火をつけてしまうと  
も知らずに。

「はあ？」

先ほどまでとは違う、敵意と憎しみのこもったドスの  
きいた声がある。その声が、目の前にする同じ女の子の  
口から発せられた声だと気づくまでに、わたしは数秒を  
要した。

表情は人類の大敵を見るかのように嫌悪に染まってお  
り、暗黒めいた殺意の波動が身体から溢れでている。歯  
ぎしりの音がギギギ、とする。昼休みに小学校の図書館  
で読んだアレのようだ。悔しいのう。

せつかくいい友達になれそうだと思ったのに、どうや  
らきみは敵だった。きみにとって、わたしも敵だった。

「きのことか w w w w w w w w w w w w w w w w w w w  
的にたけのこに劣ってるのに w w w w w w w w w w w」

嘲笑。きみは人差し指をわたしに指して、おかしくて  
たまらないといったようにお腹を抱えて口元を三日月状  
に歪ませる。絶世の美少女が台無しだ。

「き、きみは……わかってないね！」

不思議と声が出た。正直中学時代はオンラインゲーム  
にはまってほとんど不登校で軽く人生を棒に振っていて  
家族以外の人とはまともに十秒以上会話できた試しのな

いわたしだけけど、きのこたけのこ論争という、人類の  
闘争本能を揺さぶる問題には、自然とお腹から声を出す  
ことが出来た。

「たけのこなんて、手が汚れるだけだよ！」

「その点きのこはいいね、竿の部分にチョコがついてな  
いから w w w w w w w w w w w w w w w w w w w  
w」

わたしにはきみの言葉のすべてに草が生えているよう  
に思えて仕方がなかったよ。

「ふん、たけのこなんてまず形からしてダメだよ。きの  
こは見た目がいいんだよ」

「デザインにこだわって肝心の中身がぼんこつじや、な  
んにもならないでしょ w w w w w w w w w w w w w w  
て二の次だね。そもそもデザインだってどう見てもちん  
p——」

「キミたち！ やめたまえ！」

初対面でいきなり春のきのこたけのこ大戦争祭りを始  
めてしまったわたしたちはすぐに教師たちに取り押さえ  
られて、生徒指導室に連行された。

純真×びゅあぶりーど

珠洲鈴涼理

「この物語は流星物質3掲載『びゅあぶりーど』の続きのお話なの。でもこの本からでも読めるんだって。でも流星物質1と3を読んでもっと楽しめるの。

十一歳アイドルいばらとぷろりゅーさーのあったかいアイドル活動、びゅあぶりーど。はじまります♪」

\* 14 \*

「にやー」

おはよう、茨。

「にやー」

何かの遊びかな？

「にやーん？」

……にやーお。

「ぷろりゅーさーは日本語でいいよ」

仲間に混ぜてもらえない！

「かわいい？」

うん、かわくて思わず我を失うところだったけど、何

で猫？

「今日一日いばらはねこさんのな」

ユアキヤット？

「キヤットじゃなくてねこ。にやー」

どういうことだろう。合わせればいいのだろうか。

しかしここは合わせてあげるのが大人の器量だ。ほら、どことなく遊んでほしそうな顔してるし。はい、お手。

「にや？ それはいぬだよ、ぷろりゅーさー」

と言いつつおててを差し出す茨が愛おしい！ 肉球めいたふにふに感。

「お仕事まであそぼ？」

そっか……。学校が終わればすぐ仕事。お友達と遊ぶ時間もなくて、きつと茨は寂しがつてるんだらうな。

その寂しさを俺が紛らわすことができるなら――。

「のどごろごろして？」

こ、こうかな？ 喉をなでればいいのか？

「にやっ、にやあー……気持ちいいよ、ぷろりゅーさー」

こしよこしよ。これは、背徳的だなあ。

「にやっ。ふにゆう」

……。あかん。もうお仕事準備あるし、やめよっか。

「えー」

ほら、着替えておいで。

「うん。……いばらのこと飼いたくなくなった？」え……

「冗談だよ、ぷろりゅーさー。にやあ」



初キス大作戦！

文里荒城

桜がひらひら舞っていたのを覚えている。

高校に入学して二度目の春。彼女と出会って二度目の春。

「好きなの……！」

校舎裏、花びらの舞う桜の木の下で、初めて自分の想いを告げた。

「え……？」

突然の告白に驚いて、ショートカットの少女が目を丸くする。

顔を真っ赤にしながら自分の想いを告げた張本人——  
神野綾美は、俯いたせいで表情を隠す綺麗な長い黒髪の下で、眉根を寄せて唇を噛む。

言ってしまった、と後悔が襲う。

綾美の目の前に立っている少女は、佐々木志穂。耳を隠すか隠さないかの長さであるショートヘアが特徴の彼女は、綾美がこの高校に入学して初めてできた友人だった。

優しい性格で、困っている人を放っておけない。喋り方は柔らかくて、その声音は耳に心地いい。少しドジなところがあって、そのドジを誤魔化そうと恥ずかしそう

に笑う姿は、綾美より身長の高い彼女を可愛く見せた。

志穂と一緒にいるのが楽しくて、嬉しくて、幸せで。彼女を『好き』だと思いう気持ちだけが友愛ではなく恋愛だと、綾美が気付くのに時間はかからなかった。

だが綾美も志穂も女。同性を好きになることは初めてで、綾美は戸惑った。気持ちを抑えようとした。告白なんかして、友達の間係をなくすのが、一緒にいる理由を失くしてしまうが怖かった。

——そうやって自分の気持ちを押し殺して、今。

ふとした拍子に想いが溢れ出して、綾美はどうとう志穂へ、隠していた好意を口にしてしまった。

押し黙る志穂。

志穂の顔を見ることができず、俯いたまま綾美はぎゅつと目を瞑る。

沈黙が怖かった。

「……綾美ちゃん」

「っ」

しばらくの沈黙の後、躊躇うように志穂が綾美の名前を呼ぶ。

が、その瞬間綾美は、志穂に背を向けて逃げ出していた。

「あ、綾美ちゃん……」  
きつとフラれる。恐怖にも似た感情が、走る綾美の胸



を占めていた。

返事なんて聞きたくなかった。否定の言葉を耳にしたくない。

志穂から逃げるため、綾美は校門に向かった。だが辿り着く前に、後ろから手首を掴まれて引き止められる。

「待ってよ」

ゆっくりと振り返った綾美の背後。綾美の手首を掴んでいるのは、全速力で綾美を追いかけてきたらしく荒い呼吸を繰り返している、志穂だった。

「は、放して！」

掴まれた手首に熱が集中する。告白した恥ずかしさと相まって、綾美の桃色に染まっていた頬がさらに赤みを増した。

「いやだ」

「やだっ、聞きたくないの！」

「綾美ちゃん」

志穂の手から逃れようと、綾美は腕や手首を捻る。

しかし志穂の手は離れず、むしろ綾美を逃がすまいとするかのように、さらに強く手首を掴んできた。

「ずるいよ、言い逃げなんて」

柔らかな、優しい声音。

その声音につられるように綾美が顔を上げた途端、志穂は勢いよく綾美の体を抱き寄せた。

服越しに志穂の体の熱と柔らかさを感じながら、綾美は大きな目を、これ以上ないほど大きく見開く。

「志……」

「あたしも、綾美ちゃんのが好き」

「……っ！」

どくん、と綾美の心臓が跳ねる。

その言葉は、綾美が一番聞きたくて、でもきつと聞くことはないだろうと諦めていたもの。

「う、そ……」

「嘘じゃないよ」

呆然と顔を上げる綾美に、志穂はにっこりと嬉しそうに微笑んだ。

「綾美ちゃんのが、大好き」

強く、綾美の体を抱き締めて、恥ずかしそうに志穂は目を伏せた。

「……嬉しい。夢みたい」

呟く声が、本当に嬉しそうで。表情は優しいもので。

志穂の言葉が真実なのだ、綾美は知った。

……それが綾美と志穂の、恋人としての始まりだった。

秋墨早希

「おはようございます」

まだ太陽が眠る住宅街に古河佳奈子は一軒一軒頭を下げながら新聞紙を投函していた。あまり身体をかがめることなく、そつと金属を持ち上げて紙を挟む。

自転車に乗りながらだと身体を大きく曲げないといけない。

だから毎朝走ることを選んだ。

肩に掛けたボストンバックから紙束を取り出し、大きな音を立てないように気を使いながら差し入れる。

莉田さんの家は寝ている犬を起こさないように忍び足で庭に近づかないといけないし、橋下さんの家の郵便ボックスとはかなり幅が小さいので、上手に折り曲げて差し挟まないで駄目だ。三百軒を全て覚えていくわけではないけれど、朝から不愉快な思いをして欲しくないから気を遣う。ただでさえ外見から大雑把というイメージがついているのだから。払拭するため丁寧にに入れていく。

『千里の道も一歩から』

頭にことわざを思い浮かべて、努力を積み重ねていくことが佳奈子の長所だと思う。

集合住宅のたくさん開いた口がまるで鳥の雛のように

待ち構えていた。いつも通りの難所にさすがの佳奈子も

口から少し溜め息が洩れてしまう。

ひとつひとつゆっくりと口にエサをいれていった。

「お疲れ様。佳奈子ちゃん」

「……はい。どうぞ」

新聞配達所に一番近いおうちに辿り着くと片桐のおじいさんに声を掛けられた。

ランニングシャツ姿で腕を振って脚を曲げ伸ばす運動をしていた。もうそろそろラジオ体操第二が終わる。いつもより佳奈子が来るのが遅かったらしい。

佳奈子が五時半に配り終わる頃には老人達はすでに起きて、新聞紙を心待ちにしているようだった。

片桐さんは自分の家が一番最後に配達されることを知ってからは

「ほれ、今日も飲んで行きなよ」

といつも牛乳が手渡してくる。これ以上身長を伸ばしたら、あの子になんて言われるだろう。いつも断ろうとしているのに、佳奈子のために追加注文されたもう一本の牛乳瓶を見るとNOとはいえない。

「ありがとうございます」

深々と頭を下げて、プラスチックの蓋をとり、ごくりと一口で頂く。白色の液体が身体に染み渡り、力がみなぎってくる。やっぱりおいしい。

「いってことよ。明日も頼むよ」

かっかつかと大きな口で笑い、空になった容器を受け取り、家の中に入っていった。

あと一息だ。

エネルギーチャージをした佳奈子は大きな足幅で掛けることにした。

## 執事オオカミ

気付けば蟬が鳴いている。

肌がじんわり汗ばみ始めた半袖の季節になると、天草あまくさ

甘音あまねは少し周囲に気を遣う。

特に今年は高校生活が始まり、新たな出会いの多い場所ということもあって、彼女の意識は一層強まっていた。

しかしどれだけ涼を取る手段を可能な限り尽くそうとも、今時ストーブしか設置されていないような学校、教室では、人間という生き物の構造上、絶対に『それ』の発生は、回避できない状況となっている。

そして今も、『それ』は天草の頬を伝って、宙に流離した。

「……暑」

まだ過ごし易い初夏の気温も、体育という授業で自ら体温を上げてしまえば、否応無く水分は身体から逃げていく。

ロードレースも控えていないこの時期に、何故五〇メートル走を二本も走らなければならないのか。

『汗』をかいてしまうじゃないか。

「……とまらないわね」

長い黒髪を高めめのポニーで括り、露出した白いうなじ

に覚えた湿り気を、天草は神経質なぐらいに、いちいちよくちよく拭いていく。

汗というものは、その人の体臭を含んだ液体だ。そしてそれが乾けば、つまり汗臭くなる。

天草は、それを気にしていたのだ。

どうして気にするのか。

天草甘音という女子は、自分の身なりや振る舞いを、化粧や上辺だけの態度で偽るようなことはしない人間だった。

周囲の評価など、自分の行いで千変するものだし、色恋事においては全く自分に関係ないものと思いついて入る。

そんな彼女が何故、汗を仕方の無いものとするのが出来ないのか。

答えは、彼女の『体質』にあった。

「あまねええ」

二本目を走り終えた一人の女子が、茹だった声を上げて、ゾンビのように天草へ近寄ってくる。

恐らくこの暑さを共感しようとしてきたのだろうが、天草は彼女に、先んじて忠告した。

「今は近寄らないで。やられるわよ」

「うあ？ あ、そっか」

天草の謎めいた発言に、しかし友人はあっさりと理解

し、歩を止めた。

やられる。という言葉。

それが『天草の体臭にやられる』という意味であることは、クラスの子の誰もが記憶に刻んでいる、共有された注意事項だ。

『体臭』と表せば、そりやくさいのかと誤認されるが、そうではない。

天草甘音は、『甘くておいしい体』の持ち主だった。

お餅のように白くて柔い肌は、雪見の大福が如くすべすべとした触り心地で、和菓子を持つほんのりと甘い砂糖の香りまで漂わせている。

人によってはいちごのショートケーキと例えられることもあるが、ともかく天草は、そんな体質を持つて生まれた少女だった。

香りだけではない。

天然の甘いフレグランスに中てられて、本人も気付かぬ内にうっかり天草の肌を舐めてしまった友人数名からは、「甘くておいしい」という感想が残されている。

天草甘音の身体は、文字通りの意味で、「甘くておいしい」のだ。

これが発覚したのは、中学一年生の頃。それから年々、歳を重ねるごとに官能的な甘さが混じり始め、最近では不用意に天草に近づいた者は、皆彼女の匂いに脳をやら

れ、蜜に誘われた花虫はなむしのように、天草の身体に触れたり、もつともつと匂いを嗅いだりするようになってしまうた。

翻って、汗。

汗は、体臭を含んだ液体だ。天草の特殊な体臭を含んだ、危険な雫だ。

いっぱい動けば、それだけ熱と汗の蒸発で、体の匂いが放散される。辺りに拡散される。匂いは風に乗る。風に乗って、誰かの鼻腔へ侵入する。

そうなれば後は、花に集まるミツバチ、飴に群がる蟻んこだ。

やられた全員に囲まれて、天草は何度か、健全な領域で揉みくちやにされたこともある。幸い男子には効果が無いようで、周囲の被害者友人たちと一応本人も、胸を撫で下ろしていた。

あの娘とわたしのピロートーク

平山ひろてる

どこか遠くで鐘の音が聞こえた。

午前零時、日付の変わることを知らせる調べが、かすかに寝入っていたわたしの身体を覚醒へと導く。

カーテンから差し込む優しい月明かりが、微かに部屋を照らしている。それだからか、ランプをつけていないのに、しっかりと部屋の様子を見渡すことができる。

ふかふかのベッドがわたしたちの体温を吸収して熱を持ち、すべすべなシルクのシーツは、一糸まとわぬわたしたちの身体を包み込む。

そんな表現、ロマンチックすぎるかな。

わたし、ロマンチストなクローエ・ローウェルはごんごんと響く低い低音を耳に入れながら、隣に寝そべる少女の髪の毛をさらりと撫でながら、そんなことを思っていた。

「おねえちゃん？」

すると少女は、ふにやあ、と蕩けるような可愛らしい声をあげて、頬を上気させたまま、碧玉のような瞳を通じて見つめてくる。同時に、するりというシーツが擦れる音が響く。

「ごめんね、起こしちゃった？」

「ううん、いいよ」

月明かりに照らされた少女の笑顔が、心の奥底にある保護欲をくすぐる。

「ん？」

「眠れなかったから」

いたずらっぽく笑う金髪少女の名は、シルビア。シルビア・クローウェル。わたしの大切で大事な妹で。

「おねえちゃんが寝かせてくれなかったせいで」

「そんなことないでしょう」

「うっそだー。おねえちゃん、そんなに可愛い顔して、ベッドの中じゃオオカミさんだもんなあー」

わたしの愛した、彼女だ。

「恥ずかしくなるようなこと言わないの」

頬の温度が高まってくるのがわかる。気恥ずかしくて、自分の亜麻色の前髪を指でつまんだ。

「えへへっ」

「まったく、もう……」

「でも、こーいうの好きでしょ？ おねえちゃん」

にやにやしているシルビア。なんだか面白くない。一方的に、彼女のペースに乗せられているみたいだ。内心むっとして。

「シルビア」

「おねえちゃん？」

「もう一度、しよっか？」

横になったまま、隣のシルビアに語りかける。

「えっ」

「足りないんでしょ？」

わざとらしく、挑発するように言ってやる。

「え、うっ、で、でも……」

突然、たどたどしくなるシルビア。かわいい。

「ほら、シルビア」

「ううっ」

くるり、とシーツの端っこをつまんで、向こう側を向いてしまった。

清らかな雪のように白い背中が露出していて、とても綺麗。でも、シーツをはぎ取られたわたしは少し肌寒い。

「どうしたの？」

「おねえちゃんがそんなこと言うから……」

「どういうこと？ どういうことなのか、おねえちゃんに教えてよ？」

「もう……」

ああもう、可愛い。

いじめたくなる、小動物的な可愛らしさ。シルビアはいつも元気で明るいぶん、こういうときにふと見せる弱い部分がとても愛おしい。

「シルビア、こっち向いて？」

「あ、うう……」

おずおずと、シーツを胸のあたりまで引き上げたシルビアが、くるりとこちらに向いた。

「相変わず、こういうのに弱いんだから」

「おねえちゃんのいじわるっ。オオカミっ！」

むきになって、頬を赤らめる彼女。大海の碧のように透き通った瞳が、抗議するように開いていた。

「あはは、ごめんごめん」

「……もう、いじわるしたくなっただけだ。」

「……もう、からかわないでよ」

「続きはまた明日ね」

「っ……！」

瞬間湯沸かし器みたいに、ぱっと顔を赤らめるシルビア。本当に可愛い。

## 流星物質4 Girl Beats Girl

---

珠洲鈴涼理 ころみごや 柊晴空 風花 キャムキャムメロン 安房理弘

文里荒城 秋墨早希 執事オオカミ 平山ひろてる

のの 小松原りんご

### 文芸サークル『流星ハートビート』

---

2013年11月4日 第1刷発行

初出イベント 第十七回文学フリマ

★傲慢かもしれないが、定価を500円くらいにせずにはいられなかった

発行者 珠洲鈴涼理

印刷所 株式会社ポプルス

---

本書の一部あるいは全部を無断で複製することは、  
法律や発行者に認められた場合を除き、著作権の侵害になるらしいです。  
また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、  
いかなる場合でも一切認められませんのでご注意くださいね。  
造本には株式会社ポプルスさんに十分注意してもらっておりますが、  
乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。  
まずは購入されたイベント名を明記して発行者にご連絡ください。  
在庫があれば送料は発行者負担でお取り替え致します、多分。  
但し、よくわからんとこで購入したものについてはお取り替え出来ませんよ。  
決まりを破る読者は女の子大好き病に罹ります。

---